

1. 略歴

1987年3月	東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993年9月	マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了 博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得 博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994年4月	神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997年4月	同 大学院言語科学研究科助教授
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学／理論言語学

b 研究課題

程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2020年度は科研費基盤(C)の課題「日英語の程度表現の微細構造および不定語のシステムとの関係」の初年度にあたる。前年度で終了した課題の最終段階で手をつけた程度変項の全称量化と関連して、最小量表現と結びつく際の極性効果について検討した論文の草稿執筆に着手し、2021年度末までに一応の草稿をまとめた。現在、出版に向けての最終調整を行なっているところである。英語に見られる特殊な最上級の形で最小量表現が否定文に用いられるときに、主部名詞が指し示す個体が存在しないというニュアンスが生じるという Fauconnier (1975) の古典的研究で観察された現象自体は、肝心の特殊な最上級が日本語に存在しないために、日英比較ができないのだが、Fauconnier が取り上げている最上級の極性現象と類似のことが不定語による程度修飾で見られるので、日本語特有のこの表現パターンと英語に見られる特殊な最上級での比較を行った。英語の場合と異なり、不定語による程度修飾で不在のニュアンスが生じないというのが得られた結果で、その原因として、不定語による程度修飾が一定以上の程度に限定されて程度についての全称量化を行うことがあげられる、という仮説を提出した。全称量化に課せられている限定が、具体的にどの程度をもって最小量とみなすか、という基準をもとにし、この基準自体が最小量表現を伴う名詞が意味する個体の存在を前提としている、というのがカギとなる論理構造である。

また、2021年度は、数詞関係も取り上げ、日本語の数詞自体の形態に関しては、分散形態論の枠組みによる分析が和漢の形態の使い分けを極めて効果的に説明できることを論証した。論文草稿をまとめるところまで進んでいる。学会発表は日本語の複合数詞について、英語と比較しながら新たな分野を開拓した。なお、論文集所収の形で刊行された論文は2019年度に完成させたものである。

上記のほか、生成文法関連の重要論文の翻訳の監修に時間を取られた。そのイントロダクションでは、フンボルトの時代から現在までを概観し、言語の多様性についての関心が生物の多様性の認識と並行して流れていると論じた。

d 主要業績

(1) 監修

渡辺明・福井直樹、『言語 フンボルト／チョムスキー／レネバーグ』、岩波書店、2020.10

(2) 論文

渡辺明、「イントロダクション」、『言語 フンボルト／チョムスキー／レネバーグ』、岩波書店、13-42頁、2020.10

渡辺明、「サイズ修飾の形態特性」、『レキシコン研究の現代的課題』岸本秀樹 [編]、くろしお出版、107-133頁、2021.4

(3) 学会発表

国内、渡辺明、「Indeterminate Complex Numerals,」シンポジウム「不定語研究の展開と展望」、日本英文学会北海道支部第66回大会、オンライン、2021.11.7

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

Linguistic Inquiry（出版元 MIT Press）、editorial board member、2020.4～2022.3

Journal of East Asian Linguistics（出版元 Springer）、editorial board member、2020.4～2022.3

Acta Linguistica Academica、editorial board member、2020.4～2022.3

the Language Faculty and Beyond (John Benjamins)、advisory board member、2020.4～2022.3

(2) 学会

日本英語学会理事、2020.4～2022.3